

Title	小島清著 世界経済入門：日本貿易の環境
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.6 (1967. 6) ,p.665(69)- 666(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19670601-0070
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670601-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

松尾弘著

『工業経済の理論と政策』

本書は、碩学松尾博士が多年にわたる成果を、「工業政策論」の講義を借りて展開されたものである。工業経済に関する著書だけでもその数は多大にのぼるが、本書が私にとって最も興味を喚起するのは、「工業政策を経済政策の一部門」としてとらえ、「したがって本書は工業を中心とした経済政策論」という点である。「政策は現在の生活に一定の影響を与え、これを一定の方向に導こうとする実践行為であるから、そこではなによりも現在の諸事実についての合理的思惟、分析の研究を要求する理論を欠いては政策論の構成は不可能」である。このような本書を一貫するプリンシプルは、経済政策論の当初の伝統であったといていい。ところが、学問の深化とともに、このプリンシプルが忘れられ、工業経済は自己完結的になり、それだけの政策ができるかのように信じられ、そのこと

が、現実に整理さるべきある種の中小企業を保護延命させ、日本経済の発展にマイナスになつてゐることは周知のとおりである。

このことは、工業経済についていま一度政策論の立場から検討が加えられねばならないことを示しているのに反し、このような意図をもった本が少なかったことは残念なことでもあった。その点、本書は、単なる工業経済にとどまらず、経済全体の中から工業を考へるといふ構成をとっており、工業発展政策の国民経済政策的意義、さらに政策論から、工業化にともなう技術の変化・経済社会の変動から、オートメーションに至るまで、理論と現状分析とを巧みにおりまぜて展開して行く。

博士は政策論の科学性を、確率的な科学の予測にもとづくものとして考えておられ、その正しさは試行錯誤によつてしかいえないとされるが、その限り私も賛成である。絶対的の唯一の政策目的はあり得ない。しかし同時に科学によつても満たされない感情が政策目的を支える要素であり、それが福祉とつながることも忘れてはならないはずである、この点については、いまこの短かい紹介では意をつくせないで、いずれ別稿で論じたいと思う

六八 (六六四)

が、いずれにせよ、工業経済という問題とありながら、このように、かくも重要な問題にまでも視角を拡張、しかも、中堅企業論・コンビナート・有効競争論・オートメーションなどの新しい問題を体系の中に汲み入れられることに成功しているということは、本書の価値をより一そう高めるものである。(評論社・昭和四二年三月刊・A5・三〇〇頁・九八〇円)

一河秀洋著

『財政学ノート』

入門書を読むことはやさしいが書くことはむずかしい。財政学の場合、「財政」が多元的はたらきをもっているだけに経済学の応用だけで済むものではない。この本の一番のメリットは著者がこの辺の呼吸をよく心得ていることである。むずかしい財政問題をむりなく読者にのみこませるソフトな講義ムードがこの本には満ち溢れている。

また手つとりはやく現代財政学のアウトラインと日本財政の現状をつかもうという人にもこれは有難い本である。はじめに戦後の日

本経済と財政から入り、予算のしくみと作用を財政投融资や国庫収支にいたるまで説きおよぶ。つぎに経費や租税の構造を最近のトピックである公共投資や担税力限界論までふくめ、その上わが国の公債の現状説明まで加えられている。そして最後にフィスカル・ポリシー、つまり有効需要操作としての財政政策の経済的効果にいたるまで懇切かつわかりやすい解説がいっぱいに盛り込んである。

問題群の構成を全体についてみると特に目新しいものはないが、把え方はよくポイントをついている。とりわけ第四章・第二節「租税原則」と第三節「租税の作用」転嫁は伝統的原則論や伝統的転嫁論だけにとどまらず、現代的アプローチからの再評価を試みてるところは、著者の意欲的な姿勢がよみとれるばかりでなくこの本に新鮮な味わいをただよわせていて気持がよい。

わずか一七五ページのテキストによくこれだけ沢山の内容を盛り込んだものと感嘆させられるが、これも学会第一線で活躍する著者の力量の一端を示すものであろう。それだけに注文もだしたくなる。それは制度的分析と理論的分析の結合度である。建築にたとえ、土台と柱がガッチリしていないと屋根も

新刊紹介

が、現実には整理さるべきある種の中小企業を保護延命させ、日本経済の発展にマイナスになつてゐることは周知のとおりである。

このことは、工業経済についていま一度政策論の立場から検討が加えられねばならないことを示しているのに反し、このような意図をもった本が少なかったことは残念なことでもあった。その点、本書は、単なる工業経済にとどまらず、経済全体の中から工業を考へるといふ構成をとっており、工業発展政策の国民経済政策的意義、さらに政策論から、工業化にともなう技術の変化・経済社会の変動から、オートメーションに至るまで、理論と現状分析とを巧みにおりまぜて展開して行く。

博士は政策論の科学性を、確率的な科学の予測にもとづくものとして考えておられ、その正しさは試行錯誤によつてしかいえないとされるが、その限り私も賛成である。絶対的の唯一の政策目的はあり得ない。しかし同時に科学によつても満たされない感情が政策目的を支える要素であり、それが福祉とつながることも忘れてはならないはずである、この点については、いまこの短かい紹介では意をつくせないで、いずれ別稿で論じたいと思う

鴨居もくすれやすいし、うまく結合しないと

家そのものが倒れる。理論と制度のバランスはよくとれているが結合は弱いというところも眼につく。たとえば経済成長と財政政策を「予算のしくみと作用」なり経費や租税構造の分析と平行して説明するという方向をとれば、理論と制度の結合度を高めることができただであらう。「はしがき」にある著者の狙いの一端がこの方向で実現できたのではないかと考える。

総括的にみて、大学全学年のみならず財政の知識を身につけたい読者層にすべて推薦できる好著である。(白桃書房・昭和四二年一月刊・A5・一七五頁・六五〇円)

古田 精司

小島清著

『世界経済入門』

——日本貿易の環境——

一九五八年は、第二次大戦後の世界経済の重大な転換期であったといわれている。それ以降、世界経済は基調的に下り坂に入り、新しい浮揚力を注入するのになければ、繁栄を

持続できないと考えられ、数多くの困難・問題が発生している。勿論、今日までのところ世界経済はまがりなりにもこれらに対処し、繁栄をつづけているが、ここでこのような世界経済の基本的潮流・構造・主要問題点はどこにあるかを考究し、それにわが国がどう適応していったらいいかを、もう一度、真剣かつ冷静に考え直してみる必要があるように思われる。

本書は、かかる問題に関して著者が最近数年間にわたって発表されてきた数多くの研究成果を、やさしく一般向けに『日本経済新聞』の「やさしい経済学」の欄に執筆されてきたものを、加筆訂正のうえ問題別に体系づけられたものである。

通読してとくに指摘できる本書の特徴は、次の諸点であらう。

第一に、世界経済の基本的潮流・問題点が明確に把握されており、現代世界経済に関する入門書としての役割を十分に果していること。

第二に、とりあげられている問題は、国際通貨問題、世界貿易の自由化と統合化、南北問題の三つであり、最後に、それらの変貌の根底にあるものとして、国際貿易パターンの

六九 (六六五)

クリストファ・ターナー

ボリス・ブスカレフ 共著

鈴木忠義 訳編

『国土と都市の造形』

原著 "Man-made America" を読んだのは、たしか一九六三年滞米中であつたが、教百頁に及ぶ本文の内容はもろろん、豊富な写真や図版の美しさに圧倒され、アメリカならではの仕事と感嘆した。こうした書物が我が国で出版されるのは何時のことかと思つたのであるが、数年を経ずして、その訳書が原著と殆んど変りない体裁であられるとは！ 何時もこのこと乍ら、我国学界の知識欲とそのバイタリティにはおどろかざるを得ない。出版は最近SDを中心として活版にこの分野の研究紹介に力をそそいでいる鹿島研究所出版会、訳者は工・農学関係の少壮の学徒が六人、東大工学部の鈴木忠義助教授が監訳編集にあつておられる。

原著者の一人、ターナーは造園学と都市計画論の権威、既に一九三八年特色ある景観

は入門書でありながら、それを越えるすぐれた理論的・実証的研究書であり、さらに読者に対して問題意識なり世界経済への関心をよびおこさずにはおかない魅惑的な啓蒙書でもある。勿論、数多くの内容・理論・アイデアをもり込みすぎているために、本書だけでは十分に理解できない部分もあり、さらにここにもり込まれた理論・実証分析・政策提言に關しては、ユニークかつ大胆であるが故に、あえていえば多くの問題点や疑問も存在する(一層詳細な著者の理論・考え方および問題点・疑問点については、拙稿の『本誌』一九六四年二月号、九月号および一九六五年九月号の研究ノート、新刊紹介、書評等を参照されたい)。しかし本書には、そういった不満や欠陥の指摘をひかえさせる何かがある。それは多分、著者の問題把握の確かさ・ユニークさ、問題意識の強烈さ、現実展開との関連の密接さ等々である。

これらに關しては、ユニークかつ大胆であるが故に、あえていえば多くの問題点や疑問も存在する(一層詳細な著者の理論・考え方および問題点・疑問点については、拙稿の『本誌』一九六四年二月号、九月号および一九六五年九月号の研究ノート、新刊紹介、書評等を参照されたい)。しかし本書には、そういった不満や欠陥の指摘をひかえさせる何かがある。それは多分、著者の問題把握の確かさ・ユニークさ、問題意識の強烈さ、現実展開との関連の密接さ等々である。

これらに關しては、ユニークかつ大胆であるが故に、あえていえば多くの問題点や疑問も存在する(一層詳細な著者の理論・考え方および問題点・疑問点については、拙稿の『本誌』一九六四年二月号、九月号および一九六五年九月号の研究ノート、新刊紹介、書評等を参照されたい)。しかし本書には、そういった不満や欠陥の指摘をひかえさせる何かがある。それは多分、著者の問題把握の確かさ・ユニークさ、問題意識の強烈さ、現実展開との関連の密接さ等々である。

垂直貿易から水平貿易への構造変動、その構造変動の要因が分析されており、単なる歴史的・実証的分析にとどまらず、一つの理論的筋を通しての把握がなされていること。

第三に、これらの考察を通じて、日本の立場、日本貿易の環境・進路といった視点が十分に活かされており、こういった世界経済の動向下にあつて、日本は今後どうしていったらいいかが明確化されていること。

第四に、個々の問題において、それぞれユニークかつ有意な数多くの理論・アイデア・実証研究がみられること、例えば、規範的概念によるドル不足の分析、合意的分業原理、中南米経済の「高原経済学」による研究、関税一括引き下げの効果分析、貿易結合度やシェア指数による貿易構造・比較優位の実証分析、交易条件の長期的下降傾向と上方硬直性や輸出前線や輸入依存度の山型変化の法則の指摘・発見等々である。

第五に、かかる理論的・実証的研究のみでなく、日本の立場を十分考慮しつつ、数々の政策提言がなされていること。例えば、レント・カレンシー構想、太平洋自由貿易地域構想、直接的生産目的援助等々である。

これらの諸点からも明らかのように、本書

論を展開した Gardens in Modern Landscape

を発表して以来、都市環境、というよりは生活環境一般について深い造詣をもち、現在、エール大学教授、その関係であろう、原著はエール大学出版から刊行されている。

本書の何よりの特色は、工業化、都市化によって急速に変貌しつつあるアメリカ国土の現状を特に視覚的デザインという側面から捉えたことにある、景観と美という問題が全体をつらぬく一つの糸となつていて、全文四四一頁は、序文と結びを除いて、六部にわかれ、その構成は、

- 第一部 都市の景観——人工都市の美
- 第二部 住宅団地——低密度住宅団地の美
- 第三部 舗装のリボン——高速道路の美学
- 第四部 技術の記念碑——産業施設、商業地区の美
- 第五部 オープン・スペース——レクリエーションの美

第六部 将来への重要課題——史跡の保存となつていて、このうち、第一部は景観一般論ともいふべきもので、現在のアメリカの景観における様々な問題点が人口の定着パターンとの関連において指摘されている。二部以下六部まではサブタイトルであきらかなよう

新刊紹介

に、生活環境の主要な側面、住宅、道路、商業施設、レクリエーション地区そして史跡に關して審美的見地から現状とそのあるべき姿を詳述したものである。豊富な写真と図版が随処にはさまれ、まさに著者の視覚的世界観の表現ともいふべきものであり、この意味で「見る」ことを強調している。とはいいなから、単に「見て楽しむ」という気軽な態度で本書を開いた読者は恐らく後悔するだろう。本書は単に「見る」だけでなく「読む」能力をも要求しているからである。内容はかなり専門的かつ知的なものであり、記述は種々様々な対象について、ある場合には冗長とも思える程詳細に行われているから、本書を讀して、アメリカの景観について、一つのヴィジョンをもつにはかなりの理解力と総合力とが必要でもある。

傾向のあることは否定し得ない。たしかに、社会経済的側面にも周到に言及されているが、しかしここには景観を考える上で基本的な重要な視角、即ち文化的なそれが欠けている。景観を人間がつくりだしてゆくもの、景観の美というものは人間のみに通用するものである以上、われわれ個人々々の行動と物の見方を規制する文化の存在を前提しないでは、これらについて語ることはできない。少くとも極めて重要な部分をミスすることになる。最近の人間工学や行動科学の発達によつて、たしかに、われわれは「最適な」生活環境を設計するために有効な多数のインフォメーションをたくわえつつある。しかし、「最適」とは一体何か、又、何故人々は「美しくらざる」状態に身を横たえて平気であるのか、いやむしろそれを安住の地とさえ考へているのか、ハレムの黒人が考へる美と、パークアヴェニューの住人のそれとは果して同じものであるか、又、ニューイングランドの農夫はニュージャージー州の工具と同じ景観への反応を示すであろうか、これらはすべて文化を中心に考えなければ解答し得ない問題であろう。

ともあれ、本書と対比して、Man-made